

くに し せき 国史跡

み の かね やま じょう あと 美濃金山城跡

かなめ
美濃を制する「要の城」



城のはじまり

美濃金山城(以下「金山城」)の歴史は、天文6年(1537)の斎藤大納言正義(妙春)による「烏峰城」の築城に始まります。持是院家(斎藤妙椿を始祖とする家系)を継いだ妙春は、この地に「掻き揚げ」の城を築き周辺勢力と争いました。

土岐悪五郎(土岐久々利氏)との争いでは、羽崎口の合戦(可児市羽崎)や中村口の合戦(御嵩町中)の記録が残り、「可児大寺記」(願興寺)には、「金山の城より斎藤大納言所々に相働き事さわがしくその年(1541)の祭礼はなかりしなり」とあるなど、激しい戦いの様子を伝えています。天文17年(1548)、妙春が土岐悪五郎の館で謀殺され、戦いの歴史に幕が下ろされました。これには妙春の勢力拡大を恐れた斎藤道三の思惑も背後にあったとも考えられ、その後の烏峰城主は道三の家臣(実子等諸説有)の長井道利が引き継ぎました。



斎藤大納言正義(妙春)画像
(浄音寺蔵)



正義(妙春)の墓所がある「浄音寺」

森家の活躍と城郭整備

永禄6年(1563)、小牧山に城を築き居城とした織田信長は、永禄8年(1565)に美濃への侵攻を開始し、烏峰城を攻略。森可成にこの城を任せて美濃国攻略の糸口としました。

可成は城の名を金山城とあらため、以後金山城は森家とともに戦国史にその名を刻み、森忠政が信州川中島に転封になるまで、東美濃の戦略拠点、木曾川水運の要衝として城下町とともに整備されていきます。

最終的には、忠政が城主の時に現在の遺構に見ることができる、織豊系城郭の典型といえる特徴を備えた城郭にまで拡張整備されました。

城跡のみどころ

- ❖ 織豊系城郭の特徴
 - ❖ 城の各所に張り巡らされた「石垣」
 - ❖ 瓦葺屋根の建物があったことをあらわす「瓦」
 - ❖ 建物を支えた「礎石」
- ❖ 高度な土木技術を示す「削られた岩盤」
- ❖ 城の終わりを伝える「破城の痕跡」

「破城」により意図的に壊された石垣



かなめ
「要の城」

金山城は美濃の中央に位置し、木曾川や東山道を眼下に見る要衝にあることから、美濃統治のための重要な城でした。尾張統一を果たした信長が、美濃を攻略する際にまずこの城を押さえたのもこのためです。

森長可は小牧長久手の戦いに出陣する朝に書いた覚書（遺言状）に「此城はかなめにて候間」と記し、この城の重要さを伝えています。



森長可 画像(可成寺蔵)

森家 歴代城主

可成 (よしなり)

信長の尾張統一戦とともに戦い、美濃攻略の先駆けとして金山城主となる。足利義昭を奉じた信長の上洛に同行し、京・畿内の治安維持に辣腕をふるった。その後、織田家宿老衆の中でも柴田勝家や佐久間信盛等に先立ち、京への交通の要衝の地にある宇佐山城(滋賀県大津市)の城将を任されるなど信長の信任を受けた。信長を窮地に追い込んだ志賀の陣の端緒に、南進する浅井・朝倉連合軍の侵攻に抗し討死。享年48歳。

長可 (ながよし) (可成次男)

父可成の亡き後金山城主となる。剛勇の将として名高く「鬼武蔵」の異名を持つ。甲州武田攻めでは先陣を務め「人間無骨」の槍の手に戦場を駆け勇名を馳せた。その戦功により、信濃国のうち川中島四郡が増加され海津城主となった。本能寺の変の後にはいち早く金山城へ帰還し、その後一年余りで東美濃を制圧した。小牧長久手の戦いで徳川本隊と激戦の末銃弾を眉間にうけ亡くなる。享年27歳。

長定 (ながさだ) 乱丸 (らんまる) (可成三男)

12歳のとき小姓として信長に出仕しその才覚を認められていく。信長が安土城に移る天正7年(1579)頃からは、信長の使者や奏者役を務めるなど、小姓衆の筆頭として重要な役割を果たした。兄長可の川中島への転出にともない金山城主となり将来を嘱望されるも、3カ月後の本能寺の変で弟の坊丸、力丸とともにその短い生涯を閉じた。享年18歳。

忠政 (ただまさ) (可成六男)

長可の跡を継ぎ金山城主となる。豊臣政権の主要な大名として活躍し、豊臣の姓及び桐紋の使用を許された。秀吉亡き後、五大老筆頭の徳川家康の命により兄長可がかつて領有した信州川中島13万石に転封となるなど家康との親交を深めた。関ヶ原の合戦後に美作国津山18万石の国主として栄転し、森家は幕末まで大名として存続した。忠政は、京に滞在中急の病となり亡くなる。享年65歳。

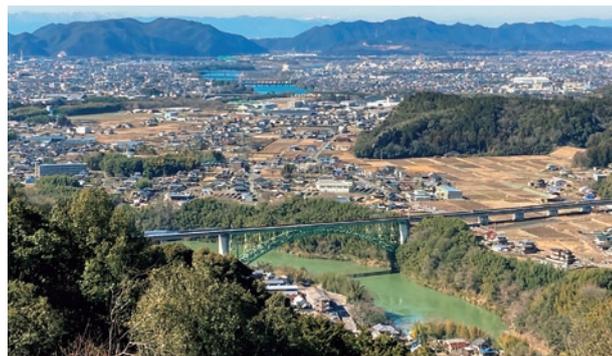
美濃金山城跡の歴史 ~その始まりと終焉~

年(和暦)	できごと
1537(天文6)	斎藤大納言正義(妙春)が烏峰城を築城。
1565(永禄8)	織田信長の美濃侵攻により森可成が城主となり金山城に改称。
1570(元亀元)	宇佐山城の攻防戦で可成死去。長可が城主となる。
1577(天正5)	乱丸が信長の小姓として出仕する。
1582(天正10)	3月 武田攻めの道中、信長が金山城に宿泊する。
	4月 長可が信州海津城主となり、弟の乱丸が金山城主となる。
	6月 本能寺の変で乱丸、坊丸、力丸が死去する。
	6月 長可が海津城から金山城に帰還し、再び城主となる。
1583(天正11)	金山城を拠点とした、長可による東美濃の制圧が完了する。
1584(天正12)	小牧長久手の戦いで長可死去。弟の忠政が城主となる。
1600(慶長5)	忠政が海津城主として信州川中島へ転封となり、金山は犬山城主石川光吉の領有となる。 その後、破城及び金山越が開始される。

明暦2年(1656)に「金山」は現在の地名「兼山」に改められました。

「金山越」の伝承 (*…「かねやまごえ」ともいう)

犬山城は美濃金山城の移築であるとする伝承があり、これを「金山越」と呼びます。犬山では「正事記」など、金山(兼山)では「金山記全集大成」などの史料に記され、双方の地で語り継がれています。



解体された金山城の建材は、筏に組まれ木曾川を下し、犬山へ輸送されたと伝わります。